

平成30年度地域とともにある学校づくり推進フォーラムの概要

今年度全国4会場で行われるコミュニティ・スクールの全国フォーラム「平成30年度地域とともにある学校づくり推進フォーラム」のうち和歌山会場を、8月23日（木）に和歌山県民文化会館において開催しました。フォーラムの概要を報告します。

概 要

○開会行事 「きのくにコミュニティスクールについて」

和歌山県教育委員会 教育長 宮下 和己

- ・地域をいかに元気にしていくか、学校のあり方をどう捉えていけばいいのか、教育の中で何が必要か等を協議することを重要な取組と位置付け、教育の中核的な施策として「きのくにコミュニティスクール」を推進している。
- ・地域や保護者の方々に、応援や評価をしてもらうだけではなく、学校が地域にどう貢献するか、保護者にどうメッセージを届けていくかを考え、学校の取組を全てオープンにしていく。これからの子供たちにどのような力を育成していけばいいのか、学校と地域、家庭が共通理解し、同じ土俵で議論しなければならない。本県では、その出発点にたったところである。
- ・ふるさととは居心地のよい場所でなければならない。居心地のよい場所にするためにはコミュニティ・スクールが必要である。今、教育にとって大きな転換期であるが、「不易と流行」の不易の部分問い直す時ではないだろうか。単に新しいことに取り組むのではなく、地域の大切さや地域の中の学校の存在等、コミュニティ・スクールの取組の中で改めて考えていきたい。



○講 演 「コミュニティ・スクールが培う子供たちの力」

秋田県由利本荘市教育委員会 教育長 佐々田 亨三 氏

- ・コミュニティ・スクールを導入しなくても、既に学校と地域が連携した取組を行っているかもしれない。秋田県でも、以前から学校と地域が連携してふるさと教育に取り組んでいる。しかし、今までよりも子供たちが地域に誇りを持ち、地域を愛し、地域をどうするか、地域とどう関わるかを考えるため、コミュニティ・スクールを導入し、定着させてきた。
- ・昔は、地域住民が神社に集まり、神社で学んだり教え合ったりしていた。今、学校は閉じられていると言われることが多いが、実際、学校は開かれている。学校は、「地域への開き方はどうか」ということを、常に検討しながら、時代に合わせたものにしていくことが必要である。



- ・子供も大人も地域から県外に出て、年々少なくなっているが、盆・正月には帰ってきて神社に行ったり、地域の祭りに参加したりしている。神社のように、いつかは帰って来たり、集まったりできる場所を地域の学校としていきたい。これを「氏子的コミュニティ・スクール」と名付けている。
- ・秋田県の課題として、人口減少率が全国一高いことと、高等学校と大学卒業者の残留率は全国一低いことがある。その他にも地域の教育力の低下等、様々な課題がある。地域の課題に目を向ける子供、地域の未来を考える子供、地域づくりについて考えられる子供を育てるために、コミュニティ・スクールが必要である。
- ・開かれた学校だけでなく、開かれた地域にならなければならない。開かれた地域とは、大人が子供をどう教育するか、育てていくかを本気になって考えていくことである。
- ・様々な課題を解決するために大事にしたいのは熟議である。様々な立場の人が熟議をして課題を共有し、その共有したことから協働へ向かう。熟議をして出てきた課題が将来を見据えた課題でないと、コミュニティ・スクールも形だけのものになってしまう。
- ・コミュニティ・スクールは、学力の向上にもつながっている。全国学力状況調査では、地域や家族との関わりや地域の課題解決のための問答までのやりとりが、B 問題の正答率につながっていると感じる。
- ・全ての教員に学習スタイルを確立してもらうため、熟議には教員にも関わってもらっている。熟議は、教員や地域の方が課題を出し合ったり、取組を決めたりするときに行っている。一方で、教員は、子供たちが地域に出て、地域の課題解決を行うときに活用できるノートの取り方を決め、指導している。

○ディスカッション 「ふるさとの未来を託せる子供を育てるために」

司 会：京都光華女子大学 准教授 西 孝一郎 氏（文部科学省CSマイスター）

参加者：北海道科学大学 教授 出口 寿久 氏（文部科学省CSマイスター）

山口県立周防大島高等学校 校長 村上 哲朗 氏

和歌山県有田市CS推進員 垣内 淳 氏

和歌山県田辺市立芳養小学校共育コミュニティ関係者

山本 とし子 氏 神足 可奈子 氏

和歌山県立橋本高等学校 生徒会長 榎本 航征 さん

- ・「ふるさと」は、時間、空間、仲間の3つの間の「三間（さんま）」でできている。
- ・空間としてのふるさとを作るためには、人と人、コミュニティとコミュニティ等の「つながり」「ふ

活躍できる。コミュニティ・スクールではみんなが主体である。相互をつなげ合う社会が実現になれば、とてもいい社会になると感じている。

- ・コミュニティ・スクールには、時間、空間、仲間をつくる力がある。「子供のために」と考えて、取り組んでいることが、今の子供だけでなく、未来の子供につながる。また、空間をつなぎ合わせていき、仲間としてみんなで取り組んでいくことがふるさとにつながる。子供のために、みんなであつなぐ、ともにある学校がコミュニティ・スクールである。

○分科会 【小学校・中学校の取組】

- ・かつらぎ町立渋田小学校では、ふるさとに愛され、ふるさとを愛する子に育ててほしいという願いのもと、かつらぎ町内初の学校運営協議会が設置された。大きな困難を経験した学校だからこそ、日頃から学校運営協議会で子供や学校の実態を共有しておくことが重要であると考え、同協議会においていじめの報告も行っている。



- ・奈良市田原小中学校では、学校と保護者・地域が信頼関係を構築することを目的にコミュニティ・スクールを導入し、子供たちが積極的に社会と関わる力を育てるための取組を行っている。起業家体験推進事業では、子供たちが「大和茶」など地域の素材を生かし発信する方法を地域の方々と共に考えることで、地域に貢献するとともに、地域の方々に学校のことをより知ってもらう良い機会となっている。

- ・子供たちが地域の懐で育まれていると感じることで、自分たちも地域のために何かできるのではないかと考えるようになる。大人も子供も共に育ち、育てあう学校と地域の関係づくりを推進していく。

○分科会 【高等学校・特別支援学校の取組】

- ・コミュニティ・スクールは学校と地域がwin-winの関係でなければならない。地域貢献や学習支援の活動において学校を理解し、学校を応援してくれ、なおかつ、学校運営協議会を対等な立場で進められる人を選ぶように配慮した。



- ・最初からすべての教員をコミュニティ・スクールに巻き込むのが難しくても、協力してくれる人から巻き込み、どんどん広げていくことが大事である。
- ・不登校傾向または仲間を構築できない児童生徒に対する支援として、地域の方に「失敗してもいいよ、やっpegらん」と励ましてもらい、したことに対して褒めてもらうという経験を重ねるこ

とは有効である。

- ・和歌山県で育ち、和歌山県に誇りをもって生きていく子供を育てたい。学校の取組を地域に知ってもらい、地域の人に「ありがとう」と言ってもらえる活動を通じて、自己肯定感、自尊感情を高めたい。
- ・和歌山での就職、和歌山の生活もいいなと思う生徒を増やすために、子供たちが地域に出て、和歌山の実情を知ることができる経験をさせたい。
- ・将来地域に残る人材、一度外で学び帰ってくる人材、地域外から応援するサポーター人材を育てたい。学校で地域の課題を解決する方法を考えさせることで、子供たちに当事者意識を持たせるようにしている。

○分科会 【熟議】

- ・学校運営協議会では、熟議を行うことが重要である。熟議とは、「子供たちみんなが地域の子」とであるという意識を持ち、熟慮と議論を重ねながら、課題解決を目指し、将来構想を練る対話のことである。熟議をすることで、課題の解決やめざす姿の実現に向けて、それぞれができることを「役割分担」する。
- 
- ・熟議は、学校と地域住民等が「地域でどのような子供たちを育てるのか」「何を実現していくのか」という目標やビジョンを共有するための有効なツールの1つである。
 - ・挨拶などを通して子供と顔見知りになり、子供と地域住民、地域住民と教職員、地域住民同士が出会う仕掛けを計画し、子供と大人と一緒に活動できる場を作ることが大切である。（熟議体験から出た意見）
 - ・地域の伝統行事や地域の清掃等のボランティア活動へ大人が積極的に参加し、その活動への子供の参加を促し、大人と子供と一緒に活動することが大切である。（熟議体験から出た意見）
 - ・子供たちが、地域学習、防災教育やキャリア教育を通して、地域の魅力や課題について学習を進め、その中で大人が子供たちと関わりを持ち、地域を愛する心を育てることが大切である。（熟議体験から出た意見）